

テクノエイド (上級)研修会

優秀賞

ベッド上患者のスライディングボード 活用の事例

佐久総合病院

小海分院 医療療養型病棟

吉岡 千恵美

施設概要



- 部署 : 小海分院 医療療養型病棟 病床数 (49床)
- スタッフ : 看護師14名 看護補助者(介護福祉士)13名
- 関係スタッフ : 医師9名、リハビリスタッフ19名
医療ソーシャルワーカー 2名、管理栄養士 1名
- 特徴 : 高齢者の尊厳を支え、安全で安心して生活できる環境を保障しながら、小海を含める南部5ヶ町村の医療と関連施設が連携を密に行い、つなぐ看護介護の実践により注力している。

事例概要と課題

対象者：左半身麻痺 麻痺側は拘縮が強く、健側側の筋緊張高い

移動：全介助（フレックスボードを利用し、ストレッチャーへ移乗）

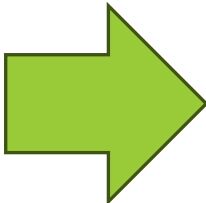
- フレックスボードでの移乗後、患者より左腕の痛みの訴えがあり、移乗の際に左腕を引っ張ってしまった為に痛みが生じた可能性が考えられた。
- これまでも、患者を支える位置まで手が届かず、服や腕、足を引っ張ったりとする場面が多く見られた。



- フレックスボードの正しい手技方法が部署内で共有出来ていない。
- 患者に合った、安全な移乗方法が検討されていない。

課題に対する対策

再度、用具の正しい使用方法を学び
個々に合った移乗方法の統一を図る。

- 
1. リハビリスタッフよりフレックスボード・リフト活用時の手技方法を習得。
 2. 個々に合った移乗方法が行われているかを確認し、統一したケアをチームに周知。
 3. 関係スタッフへ伝達講習を実施。

対策実施後の結果

- 福祉用具活用時の使用方法を伝達講習することで、スタッフ全体が移乗時に安全を意識することができ、同様のインシデント事例が無くなった。
- フレックスボードの活用は、移乗時のベッドの高さや角度、患者を支える位置、スピードを意識して実践した結果、患者からは「今日は怖くなかった」「毎回こうしてほしい」との声が聞かれた。
- 入院当初、ストレッチャー移動をしていた患者に対し、筋力・耐久性が向上したため、車椅子乗車を開始したが、移乗の際に眩暈、嘔気が出現した。リフトによる移乗に変更した結果、眩暈・嘔気は減少、本人の負担も減り、在宅でも利用する方向で調整できた。
- 個々に合った移乗方法の検討により、患者・介助者双方の身体的負担軽減、安心へと繋がり、ADL・QOLの向上に繋がった。また、在宅を見据えた取り組みにより、双方に優しいケアが提供出来ていると実感できた。

テクノエイド (上級)研修会

優良賞

まんじゅう うんまいなあ

鹿教湯三才山リハビリテーションセンター

鹿教湯病院 南7階病棟

山本 雅史

施設概要

- 病棟種別 : 地域包括ケア病棟 ベッド数41床
- 配置基準 : 看護師 13対1、介護職 25対1、
- 勤務体制 : 2交代制
- リハビリ : 週5日 (20～60分/1回)
- 地域包括ケア病棟とは、急性期医療を経過した患者及び在宅において療養を行っている患者等の受け入れ並びに患者の在宅復帰支援等を行う機能を有し、地域包括ケアシステムを支える役割を担う病棟。

事例概要と課題


手術後廃用症候群でリハビリ目的で転院。

- 前医では床上リハビリのみ実施、覚醒にムラがある。
- 食事はチルト型車椅子で全介助だが、食事摂取量は不安定。
- 声をかけると自身で体を横に向けることはできるが、下肢の痛みが強い。
- 股関節が硬く、骨盤をしっかりと起こして座ることが難しく、車椅子乗車時に姿勢が崩れやすい。
- ケアの介入に強い拒否があり、興奮してしまうことが見られる。

課題に対する対策

利用者が苦痛なく、安心して車椅子に移乗介助できる方法の検討。

本人の気持ちや精神の状態に合わせた支援の方法の検討。

- 
1. 電動ベッドのギャッチ機能を使った起き上がり。
 2. トランスファーボードを使用し、介助者二人で移乗介助。
 3. 移乗時は介助者に介助ベルトを装着し、つかまる場所を確保。
 4. 本人のペースに合わせた介入に重点を置いたケア。

対策実施後の結果

●介入10日程

- ・立位を介した移乗が可能
- ・離床機会が増え、言葉数も増加



●介入20日

- ・食事の前半は自力摂取可能
- ・集団レク活動に参加し、表情も豊かに



●介入1ヶ月以降

- ・車椅子を普通型に変更、軽く支える程度で移乗可能
- ・立位安定し、日中は尿意を訴えトイレに移動
- ・朝の集団体操が日課になる

家族から差し入れの、大好きな「まんじゅう」を半年ぶりに食べて
…「まんじゅう、うんまいなあ」